

『アーサー・ラザフォード氏の遅すぎる初恋』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

玄関は日本らしく引き戸だった。がらりと開けて、時広は「ああ…」とため息をつく。

『どうかしたのか？』

まさか泥棒に入られていたとか？ アーサーは時広の背後から家の中を覗(のぞ)きこんだ。薄暗い廊下がまっすぐ奥へと伸びているのが見えたが、特に荒らされている様子はない。

『空気がこもっちゃっています。真夏に閉め切っているのはよくないですね、やっぱり……』

時広はそう言い、靴を脱いで中に入っていく。確かにムツとした湿度を感じた。

(日本家屋は靴を脱いで入るんだよな……)

アーサーは時広がしたように靴を脱ぎ、飴(あめ)色(いろ)の廊下の板に足を載せた。天井が低い。頭上に手を伸ばせば触れてしまいそうなほどだ。

時広は一番手前の和室に入っていき、カーテンと窓を開けている。せかせかと家中を歩きまわって、時広はすべての窓を開けた。そうすると微かに風が通っていくのがわかる。時広の言うとおりだ。

『今お茶を淹れます』

時広はキッチンへ行ってやかんをガスコンロにかけた。湯が沸くまで別の用事をすまそうと思ったのか、すぐにキッチンを出て家の奥へと移動していく。アーサーはなんとなく後を追いかけて、奥の和室に時広がいるのを見つけた。豪華な装飾が施された祭壇の前で、時広は正座して両手を合わせている。祭壇には老女の写真が置かれていた。どことなく時広に似ているから、これはきっと祖母だろう。これは死者を悼むためのものなのか。

『トキ、これは？』

『仏壇です。亡くなった家族の位(い)牌(はい)を安置する場所で、日常的にここで祈ります。朝晩の挨拶を、生きているときと同じようにここですることもあります』

老女の写真を見つめる時広の横顔は、とても寂しそうだった。アーサーがここにいるのに、こんなにそばにいて、ストーカーから守ってあげようとしているのに、まるでいないもののように時広が扱っているようで、もどかしく感じた。

もっと頼ってくれればいいのに。なんでもしてあげるだけの財力はある。人を雇えばもっと安全に日常生活を送れるようになるだろうし、なんなら敏腕の弁護士を雇ってストーカー男を法的に追い詰めて遠くへ追いやってしまうこともできる。

だが時広にとって、自分はただの日本語を教えている生徒であり、いつかアメリカに帰ってしまう異邦人で、好意を寄せてはいるがアクションを起こすほどの気持ちは抱いていない男なのだろう――。

いや、なにを残念がっているのか。時広は軽い気持ちで手を出せない相手だし、そもそもアーサーの好みのタイプから大きく外れていると、自分自身にさっき確認したばかりだ。

いつもの自分らしくない。なぜ気持ちがかうも揺れるのか。

『トキ』

振り返ってほしくて、名前を呼んだ。

アーサーの声にびくっと肩を反応させて時広が振り返る。なぜこの家の中にアーサーがいるのか、不思議がっているような目をしたかと思うと、すぐに「あ、やかん」と呟きながら立ち上がった。アーサーの横を通り抜けて、時広はキッチンへと駆けていく。

アーサーがキッチンへ行くと、急須で丁寧に緑茶を淹れていた。この暑い最中に、熱いお茶か。声には出さなかったが、思ったことが顔に出ていたらしい。

『暑いときこそ熱いお茶がいいんですよ。冷たいものばかりとっていると、内臓によくないですから』

苦笑しながら時広が年寄りじみたことを言った。トレイに湯呑みを載せて持つと、『こちらです』と時広が先導して移動する。行き先は玄関脇の和室だった。どっしりとした木製のローテーブルが中央に置かれ、テレビが壁にかかっている。

『座布団を出しますね』

トレイをテーブルに置いてから、時広は押し入れから座布団を出した。座布団はN. Y. の日本料理店で見たことがある、平たいクッションだ。それよりもこれが押し入れかと、二段になったクローゼットをまじまじと見てしまう。上段には畳んだ布団も入っていて、下段はプラスチック製の引き出しやダンボール箱が詰められていた。

『この家はすべて和室なのか』

『そうです。祖父がずいぶん昔に建てた家なので……』

『何歳からここに住んでいた？』

『五歳から。もう二十三年にもなるんですね……』

テーブルを挟んで向かい合って座り、熱いお茶を飲んだ。なるほど、熱いものを飲んでいるのに汗が引いていくような気がする。

すうっと風が通り、どこかでチリンと涼しげな音が鳴った。音源を目で探すと、開け放した窓にウィンググラスを逆さにしたようなものがぶら下がっている。中から細長い紙が出ていて、それが風に揺らされて音が出るようだ。

『あれはなんだ？』

『風鈴です。日本に昔からある夏の癒し道具で、音によって暑さを和らげようという——まあ、ちょっと強引なアイテムではありますが、日本人はみんな好きだと思います』

時広が立ち上がって窓際へ手を伸ばす。ガラス製の風鈴に指先で触れ、目を細めた。

『これは祖父が祖母に贈ったものだそうです。毎年、夏になると出してきて、祖母はこうしてここに下げていました。そして夏が終わると、大切そうに柔らかな布でくるんで片付けるんです。祖母が亡くなってからは、僕がこうして出しています。この音を聞いていると、心が落ち着くんです』

ふっと、また寂しげな微笑みを浮かべる時広に、アーサーは座っていられなくなり、立ち上がった。引き寄せられるように時広のそばに行く。風鈴に伸ばしている細い手を、なぜか包みこむようにして握ってしまった。

『アーサー……？』

きょとんとした子供のような目が見上げてくる。黒い瞳は澄みきっていて、自分の顔が映っているのがはっきりわかった。

『どうかしましたか？』

小首を傾げる時広のその薄い肩を——衝動的に、抱きしめていた。腕の中にすっぽりとおさ

まってしまう細い体が頼りなくて、ぎゅっと力をこめる。

『あの、アーサー……？』

戸惑う声が聞こえて、ハッと我に返った。

私はなにをしているんだ？

慌てて体を離すと、時広が目を真ん丸にして硬直していた。まずいことをしてしまった。どうして抱きしめたのか、自分でもわからない。衝動、としか言いようがなかった。

内心の動揺をひた隠しに隠して、アーサーは口角を上げて笑顔を作った。

『……………すまない。泣きそうに見えたから、慰めようと思って』

『泣きませんよ』

時広はぎこちなく微笑み、目を伏せた。黒くて長いまつ毛が、白い頬に影を落とす。たまらない色気を感じて、アーサーは急いで視線を逸らした。

いったい自分はどうしたんだろう。さっきから、らしくないことばかりしている。

『そろそろ、戻ろうか』

『あ、はい』

『お茶、ありがとう。とても美味しかった』

熱いお茶で引いたはずの汗が、今度は冷や汗となって()しみ出ていた。

本文p114～120より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>

※試し読みの無断転載はご遠慮ください。